

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21年 6月 5日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2006(H18) ～ 2008(H20)
 課題番号：18720066
 研究課題名（和文）T. S. エリオットと帝国の理念、および東アジアにおける
 その思想の散種に関する研究
 研究課題名（英文）T. S. Eliot and the Idea of Empire, and its Dissemination
 in East Asia

研究代表者 三原 芳秋 (MIHARA YOSHIAKI)
 同志社大学・言語文化教育研究センター・専任講師
 研究者番号：10323560

研究成果の概要：

本研究では、20世紀英語圏における文学・批評界を代表する T. S. エリオットの「帝国」の理念を中心に、その理念の根源および射程を分析するとともに、その理念が同時代の帝国日本／植民地朝鮮に輸入された際にどのような変容をこうむり、予期せぬ流用・展開へとつながったのかを考察した。これは、英米の文脈の中でのみ考察されてきたエリオットの思想研究に再考を迫るものであると同時に、崔載瑞といった植民地朝鮮知識人に関する研究にも、英文学研究という外部の視点を持ち込むことによって一石を投じるものとなった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,600,000	0	1,600,000
2007年度	1,100,000	0	1,100,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	210,000	3,610,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：英米文学・比較思想史・植民地朝鮮・帝国日本

1. 研究開始当初の背景

日本における従来の T. S. エリオット研究は、日本の文脈と切り離されたところで英語圏における研究成果の後追いになるか、または、日本におけるエリオットの直接的「影響」関係に特化し一方向的なものになるかの、いずれかに陥りがちであったように思われる。「エリオットと日本」という問題系を設定する際に、一方向的な「エリオットの日本への影響」研究に陥らず、かといって、「エリオットに対する日本の影響」といったその裏返しにも留まることなく、エリオット思想の多方向的な可能性を日本の文脈から開いていくような研究がなされてこなかったのである。そこで、現代フランスの思想家ジャック・デリダの「散種」(dissemination) という概念を援用し、線的な「影響」関係ではなく、世界各地に蒔かれた種子がそれぞれの場所でそれぞれの環境に合わせて芽を出し花を咲かせるイメージにもとづいた「エリオットと日本」研究の必要性を強く感じるに至った。

この観点に従えば、日本において様々なかたちで花開いたエリオット思想の種子は、必ずしもエリオット自身が予期していたものとは限らず、さらにひるがえって考察すると、そのような花を咲かせた種子の中には、エリオットおよびエリオット研究者にも見えていなかった潜在力が見いだされることも期待される。このように、固定化されない流動的な「エリオット」像を探求することは、従来の研究枠組みでは困難であると思われたため、新たな思考枠組みが模索されたのである。

また、「日本」についても、従来の研究においては、それを自明の存在として単一化して扱う傾向が多く見られるという問題があった。エリオット思想が「日本」に「散種」された重要な時期である 1930年代・40年代を考えると、それは「大日本帝国」の時代であり、当然、現在一般に考えられている「日本」(内地) という領域のみならず、日本帝国支配化の植民地も含めて検討されなければならない。当時、京城帝国大学・台北帝国大学と

いった植民地の拠点大学が「日本」のエリオット研究に大きく貢献していたという厳然たる事実があり、また、それらの大学が多く植民地知識人を輩出したことも決して等閑視できるものではない。

このような問題意識から、帝国日本／植民地朝鮮において、エリオット思想がどのように「散種」され、どのような花を咲かせたのかを研究し、さらにその研究を通して、従来の研究枠組みでは見えてこなかったエリオット思想の可能性を探求することを企図するにいたった。なお、この着想を得るにいたった背景には、コーネル大学留学中に会った東アジア思想・文学・文化研究者たちとの知的な交流があった。

2. 研究の目的

「帝国」の理念を軸に、以下のような複数の小目的(1)(2)を設定し、それらの目的を並行して追求しつつも最終的には有機的につなぎ合わせるという大目的(3)をつねに念頭におきつつ研究を遂行した。

- (1) エリオットの思想における「帝国」の位置づけを解明する。その際に、「帝国」への直接的な言及に留まることなく、一見かわりの無い詩や評論の一節の中にも「帝国」的要素を解説する。
- (2) 帝国日本／植民地朝鮮におけるその思想の受容・変容を研究する。ここにおいても、エリオットへの直接的な言及に留まらず、その「種子」の痕跡を広く解説することを目指す。
- (3) さらに、(1) と (2) の研究成果を有機的に統合することにより、それぞれの分野における研究に新たな視点を提供する。

3. 研究の方法

(1) 英米の図書館が所蔵するエリオットの手稿・蔵書などを渉猟し、エリオット思想の起源・根源を探究する。具体的には、

- ① 米国ハーヴァード大学ホートン図書館所蔵の T. S. エリオット・コレクション。同コレクション内には、エリオットのハーヴァード在学中の講義ノート（姉崎正治客員教授による仏教に関する講義など）のほか、数多くのメモや手稿が保管されている。
- ② 英国ケンブリッジ大学キングズ・コレッジ図書館所蔵の T. S. エリオット・コレクション。同コレクション内には、エリオットの書き込みがある蔵書のほか、多数の未発表原稿などが保管されている。
- ③ そのほかにも、ニューヨーク市立図書館バーグ・コレクションやコーネル大学クロック図書館の手稿コレクションなどに、多くの手紙などが保管されている。

(2) エリオットの影響を受けた京都学派の思想家たち、および、「親日派」朝鮮知識人・崔載瑞に的を絞り、一次文献の精読を通じて、エリオット思想がそれぞれの文脈において、いかにして受容され変容しているのかを分析する。これら一次文献には、以下のような、これまで研究者の目にほとんど触れてこなかった極めて希少なものも含まれている。

- ① ソウル大学図書館内には、当時のまま手つかずに保存されている旧京城帝国大学図書館所蔵図書コーナーがあるが、その中にある『京城帝大英文学会会報』（京城帝国大学英文学科の大学院生による機関誌）というおそらく他には現存しない資料を開拓した。

② 関西学院大学図書館には、京城帝国大学英文学研究室の創始者でもある佐藤清の蔵書などが死語寄贈されたが（佐藤清文庫）、その中には、佐藤が京城時代に入手した貴重な資料も含まれている。

4. 研究成果

(1) 「エリオットと帝国」という問題を扱った先行研究はそもそも少ないが、それらにおいても通常「帝国」といえば大英帝国との関係ばかりが想定されがちである。しかし、発表・未発表を問わずエリオットの言説を細かく分析すると、エリオットがその思索において「帝国」として想定していたのは、多くの場合、(神聖)ローマ帝国(「大陸型帝国」)であったことが判明した。この「帝国」の「理念」をめぐる新たな視点から、エリオットの詩・批評を読み直し、たとえば長編詩『荒地』において一見「帝国」とは関係の無い詩句において、その痕跡を読み取るという成果をあげた。(雑誌論文①)

(2) いまだ十分に評価されているとは言いがたい「親日派」の代表的知識人・崔載瑞の思想遍歴を、京城帝国大学英文科における英文学研究(前出佐藤清教授の指導の下)にまで遡って描き出すことにより、崔載瑞の「親日」的言論活動の理論的基盤を、エリオットほか英文学研究とのかかわりから解読し、その「純粹な」学問研究と「政治的な」言論活動との間に一貫性を見出した。その際に、当時の「日本」における英文学研究の水準と照らし合わせる作業も行った。(学会発表①、雑誌論文②および雑誌論文③)なお、雑誌論文③は、植民地朝鮮文学・文化研究者によって高く評価され、その韓国語訳が論文集『日帝末期の文化地形図』(仮題)に採録されることになってい

る。

- (3) 日本帝国主義に哲学的な基盤を与えたとも評価される京都学派の思想を、エリオット研究の視点から再考するという研究プロジェクトへの端緒をつけた。具体的には、西田幾多郎や三木清における、数は少ないが思想的に重要なエリオットへの言及をあぶり出し、その水脈を探求するための準備作業とした。また、(2)との比較対象も行い、そこから垣間見えるエリオット思想に潜在する「帝国」の理念を問題化した。(学会発表②)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 三原芳秋、*The Waste Land Stutters*、『英語圏文化研究UT』、7巻、1-23頁、2006、査読有
- ② 三原芳秋、終わりなき内戦—中野好夫、『英語青年』、152巻8号、456-9頁、2006、査読有
- ③ 三原芳秋、崔載瑞のOrder、『사이間SAI』、4巻、291-360頁、2008、査読有

[学会発表] (計2件)

- ① 三原芳秋、*Ch'oe Chaeso's Failed Project of Kokumin Bungaku (Imperial Literature)*、Asian Studies Conference Japan、2007年6月24日、明治学院大学
- ② 三原芳秋、T. S. エリオット「伝統」論の帝国日本／植民地朝鮮における変容、2008年4月12日、同志社大学

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三原 芳秋 (MIHARA YOSHIAKI)
同志社大学・言語文化教育研究センター・専任講師
研究者番号：10323560

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし